

Newspaper in Education



むろみん

NIE サンデーキッズ



# 心の復興 笑顔で

## 室蘭・海星学院高 釜石ボランティア報告①

7月7～11日、東日本大震災被災地の岩手県釜石市で傾聴ボランティアなどに取り組んだ、室蘭・海星学院高校(香川謙二校長、236人)の生徒6人が1日、同校で活動報告しました。現地での体験を通じて実感したこと、伝えたいことを全校生徒の前で発表し、生徒たちは被災地に思いをはせていました。1人ずつ要約した内容を2回に分けて紹介します。(成田真梨子)

### 下司 知実 (2年)

滞在中、釜石ユネスコ協会の方、商工会議所の方、中高生に学習指導をされている方にお会いしました。

「釜石には、嬉しいニュースが二つあるのよ」とユネスコの方はおっしゃいました。一つはラグビーワールドカップ開催決定、もう一つは、橋野鉄鉱山の世界遺産決定です。嬉しい反面、「予算の目途が立つておらず、復興が二の次になるのでは」という心配もある」と聞いて、何とも言えない気持ちになりました。

それは今もなお、痛み始めた仮設住宅で2千人の方が暮らしているからです。

震災直後、仮設住宅は2年で出るという約束で、3千人が住み始めました。出て行

### 下田 蒼 (1年)

震災を生き延びても、孤立や悲しみから、自らの命を絶つてしまつた方が少な々あります。これを防止するために、コミュニケーションカフェや仮設などのお茶会があります。ここで私達は傾聴を行いました。

2日目、派遣前に練習していた踊りや歌を初めて披露することになりました。歌が始めてすぐ、さっきまで見向きもしてくれなかつたおばあさんが顔を上げてくれました。その瞬間、胸が熱くなり、よけ心をこめて歌いました。

震災当時に被害の大きい鶴住居(つすまゐ)地区に住んでいた方が、私に話掛けてきました。「明るく元気に歌っている皆さんを見て、ある子供のことを思い出して、少し涙ぐんでしまいました。震災当時、知り合いの子供を亡くしたんです。もし今も

### 中村 仁南 (1年)

釜石に来て3日目に、復興公営住宅の集会所で出会った70代前半位の物静かなおじいさん。皆さん和気あいあいとお話されていました。その方はあまりお話をされませんでした。ほかのボランティアさんが「どこに住んでいたの」「二人暮らしだったの」「趣味は何だったの」「今はどこに住んでいるの」などと質問を重ねていくうちに、顔が明るくなっていました。

「震災前から一人暮らしだったんだよ。趣味は畑を作って、野菜を近所の方にあげて喜んでもらうのが好きだったんだ。近所

の方は復興支援住宅に入居したり、家を建てたりしたそうです。立派なマンションの復興支援住宅は現在7棟あり、あと8棟建つ予定です。仮設に残った方は、いつ出られるのか不安になる方もいるそうです。地震が来た時にパニックを起す子どももいると聞き、胸が痛みました。

子どもたちは、カリタスのコミュニケーションカフェ「ふいりあ」や復興公営住宅で遊ぶ機会がありました。どちらでも小学校2年～5年生くらいの子たちで、卓球や歌を歌いました。遊ぶのは、すごく楽しかったのですが、こ



の子どもたちも地震が来たとうなるのかと不安になりました。壁が薄い仮設

生きていたら、きっと皆さんと同じ年ごろだったので、皆さんのようにボランティアとかする子に育っていたのかな。歌、どうもありがとう。

私はうなずくことしかできず、素直に喜べませんでした。「皆に笑顔になつてもらいたくてやったのに、もしかしたらこの人に辛い思いをさせてしまったのかもしいな」。心が締め付けられるような気持ちでいっぱいになりました。



その夜、私は海星のみんなに「私はどうすれば良かったんだろう。なんであの人は私なんか話してくれたんだろうか。そもそも踊りや歌をやつてよかったのだろうか。あの人の心を傷つけてしまったのではないかと話しました。皆は真剣なまなざしで相づち

の人から『津波がすぐそこまで来てるよ、早く逃げろ』って言われて、何も持たず、靴もはかずにトンネルに逃げたんだ。波が引いて、急いで家に走って戻ったけど、がれきしかつた。畑もがれきの下だったんだ。おじいさんが大切にしていた畑がめちゃくちゃになってしまったことを想像して、胸が苦しくなりました。



仮設住宅に1年ほど住んだ後、今の復興公営住宅に移りました。「家庭菜園はされてるんですか」と質問しました。もうやらない。おじいさんは笑

住宅に住む児童が落ち着いて勉強をするために、釜石には「スクラムスクール」という場所が設けられています。夜9時まで残っても、巡回タクシーという無料のタクシーがあるの、安心して勉強ができるそうです。利用する生徒の数は6月のテストが近くなるにつれ、増加します。家や学校以外の場所に居場所を求めてくる中高生もいるそうです。

ここで働く村橋さんから「震災を忘れないでほしい、将来に希望を持つている子がたくさんいることを知ってほしい」とメッセージを預かりました。生きていること、夢を持てること、それは幸せなことだと実感しました。だからこゝ私たちは、彼らが夢を叶えられるようサポートするべきだと思います。そして、震災によって亡くなられた方の分まで私も自分の夢を追いかけていきたいと思います。

を打つてくれました。「その方の話を受け止めるだけでよかったと思う」「長い年月を経て、やっと震災のことを話せるようになったんだと思う」「踊りや歌はやって良かったんだと思う。だつてこの機会がなければ、その方が、自分から話すことはなかったかもしれないんだから」。

皆の言葉の一つひとつがとても温かくて、心が軽くなつていきました。「1人が全てを抱え込まずに、みんなが少しずつ負担を分かち合いながら、受け止めればいいんだ。次は私の番」。次の日の傾聴が終わる「私の話を聞いてくれてありがとう」と、しっかりと手を握つてくださったおばあさんの笑顔。『傾聴こそ、分かち合い』。

傾聴に特別なスキルは一切ありません。必要なのは受け止める心だけ。8人が分かち合えば、喜びは8倍に、悲しみは8分の1になります。身近な人の話を傾けてみてください。

いながらおっしゃっていました。その表情が寂しそに見え、「もうやらない」が心に深く残り、それ以上聞くことができませんでした。

「人は、衣食住があるだけで生きていることにはならない」。どこかで聞いた言葉をふと思ひ出し、生きがいを持つことは大切だと思いました。家庭菜園をやめてしまいい、今後どんな生活を送っていくのか、とても心配になりました。

いつかまた畑を作る日が来たら、それがおじいさんの心の復興につながるのだと思います。その日が来ることを願ひながら、私は今自分ができることに精いっぱい取り組み、今を大切に生きていきます。